國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕万葉集を楽しむ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辰巳, 正明, Tatsumi, Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000664

万葉集を楽しむ

辰巳正明

すでに万葉集は難しい古典となりました。それを理解するには数多の手続きが必要ですし、少し専門的になると専門用語の理解も必要です。万葉集を専門とする私にも、現在の研究レベルの高さには追いつけません。それ故に「万葉集を楽しむ」などというのは嘘で、どこを捜しても楽しみなど無いのですが、それでも万葉集は楽しみを捜すのに恰好の古典といえます。その万葉集は漢字のみの表記で次のような歌があります。

妹手（イモガテヲ）　取而引与治（トリテヒキヨヂ）　球手折　吾刺可（ワガカザスベク）　花開鴨（ハナサケルカモ）

「球手折」の古訓は藍紙本・紀州本「ウチタヲル」、広瀬本「ウチタオリ」、西本願寺本「ウチタヲリ」と訓まれています。契沖の万葉代匠記の精撰本で「ナカタヲリ」と読むべしとして、次のように述べています。

球手折ハ、打手折ト云意ナラハ、今ノ点ハ誤ニテ、官本ノ如ク読ヘキヲ、今按、字書ニ依ニ、球ニ打ノ義ナシ。韻会尤韻云渠尤切。長貌。詩有球棘匕。又渠幽切。長也。又唐韻、恭于切。説文、盛土梩中也云々。此後ノ義ハ今ノ所用ニアラス。長也ト注セルニ依テ、ナカタヲリト読ヘシ。枝ヲ長ク折ナリ。

しかし、契沖の訓は採用されず、近代の万葉集の訓は新訓・定本・新校などは「うち手折り」と読まれ、古典大系本・古典全集本・万葉集釈注などは「ふさ手折り」と読まれ、ある段階から「うち手折り」の訓が「ふさ手折り」の訓へと移っていることが知られます。一方、「球手折」の仮名表記と思われる例に「布左多乎里家流」（巻十七・三九四三）が

あり、訓は「フサタヲリケル」です。このことから齋藤茂吉は『柿本人麻呂　評釈篇下』で山田孝雄の教えを受け爾雅釈木の「菉」はフサハシカミのことなので「フサタヲル」と訓み、「フサ」はニギル意かとします。さらに全註釈は次のように説明しています。

球手折　フサタヲリ。従来ウチタヲリと、読まれていたが、球は、新撰字鏡に「挙隅友（反ヵ）、盛土也、法也、累也、採也」とあつて、ウチと読むべき根拠がない。よつて竹岡正夫氏、真鍋次郎氏の説（万葉）に、球は手首の義、正倉院文書に、手球とあるは、タフサにあててあるとして、球をフサと読むべしとする。今、これによる。

このことから、以後「球手折」の読みは「うち手折り」から「ふさ手折り」の訓へと移り、今日の諸注釈の通説となったということです。

ただ、これを「フサ」と読んでも「球」の漢字の処理はまだです。この「球」は「梂」の誤写であろうと思われます。「梂」は説文通訓定声に「亦為菉。爾雅釈木、椒椴醜、李注椒茱萸、皆有梂。梂実也」とあり、「梂」の字は「菉」の字に同じで、木の実のこと。「茱萸」は爾雅釈木の「椒椴醜菉」に「茱萸子、聚生房貌。今江東亦呼菉。菉椴似茱萸而小。赤色」とあり、「聚生房貌」です。芸文類聚の木部の櫟にも「爾雅曰。其実梂椒之属。其子房生為梂」とあり、字彙にも「櫟木盛実之房」とあり、爾雅注疏に「盛実之房也」とあります。このことから「梂」字は「菉」字と同じく茱萸子などの木の実が房状になっている様をいうことになります。以上から「球」は「梂」の誤字で木の実の房が原義であると理解できます。写本では「扌」と「木」との混同がよくあることです。

このように、一つの漢字の理解によって歌の意味が歴史の中で大きく変化することが知られます。

私の「万葉集を楽しむ」とは、万葉集をいかに楽しむかを捜すことにあります。楽しみは向こうから来るのではなく、探しに行くものだからです。

（日本上代文学）